

ヨハネ福音書 11 章で語られる救済思想

—その提示方法を中心に—

前川 裕

1 問題設定

1) 課題と目的

新約聖書は紀元 1 – 2 世紀にかけて作成されたキリスト教文書群であり、作成された時代背景を踏まえた古典文献である。しかし他の古典文献と異なる新約聖書の特殊性の一つは、21 世紀においても、信仰への導きとして用いられる文書であるという点であろう。新約聖書を読むことはしばしば入信の契機となる。いかなる点において、二千年前の文書が 21 世紀の読者に影響を与えることができるのか。これは現代の聖書学が解明すべき課題の一つであろう。これまで新約聖書研究においては、歴史的研究によって多くの成果が得られてきた。しかしそのような歴史的知識を持たない読者であっても、聖書を読むことによって信仰に導かれる例は少なくないと思われる。このような課題を解決するための一つの方法として、文芸学的研究が挙げられよう。聖書本文を、物語の世界内においてどのように読むことが可能なかを考察することで、現代における新約聖書の意義が別の面から明らかになることが期待される。

以上の関心を踏まえ、ここではヨハネ福音書の救済思想について物語批評的な観点から検討する。人間（ないし世界全体）の救済は、人々が宗教に求める意義のうちでも重要なものの一つである。新約聖書文書では主にマタイヤルカ、またパウロ文書において特徴的な救済思想が見られることが指摘されてきたが、ヨハネ福音書における救済についての研究は比較的少ないことが指摘されている⁽¹⁾。それでもなお、ヨハネにおいても救済が重要な概念であることが想定される。

ヨハネ福音書の救済思想について、われわれはこれまで物語批評の手法を用いて 3 – 10 章を考察した⁽²⁾。今回は 11 章を取り扱い、この福音書から読みとれる救済思想およびその思想の提示のされ方について検討を試みる。すなわち、ヨハネ福音書の読者が思想をどのように受け取るよう期待されているかを調べることによって、この福

(1) Jan G. van der Watt, “Salvation in the Gospel according to John”, in: Jan G. van der Watt (ed.), *Salvation in the New Testament: Perspectives on Soteriology* (NTS 121), Leiden, Boston: Brill, 2005, 101-103.

(2) 過去の研究については、拙論「ヨハネ福音書 3 章で語られる救済思想—その提示方法を中心に—」『基督教研究』74 巻 2 号、2012 年、15-29 頁を参照。

音書が読者に与える影響力を考察する。

2) 方法論

本研究では、物語批評 (Narrative Criticism) の方法を用いる。物語批評は「物語が、価値判断・信仰・認識との関係で、読者が受け取るように意図された効果に関心を抱く」⁽³⁾ 手法であり、1982 年の *Mark as Story*⁽⁴⁾ の刊行以後 30 年を経て、聖書学研究の一手法として定着している。これは、テキストを透かして見いだせる歴史状況や歴史的な著者の思想⁽⁵⁾ を探るのではなく⁽⁶⁾、時代を問わず普遍的な読者⁽⁷⁾ に対する効果を考える立場である。物語批評は読み手への影響を重視する⁽⁸⁾。また伝承過程での二次的な本文の発展や編集の有無を考慮せず、読み手が現在手にしているテキストから読み取れる内容を考える。とはいえ、特に福音書の場合、テキストは歴史と完全に切り離されるわけではない。物語批評の手法を通してテキストの背景にある歴史的事実を探るという立場もあれば、歴史を切り離れた⁽⁹⁾ テキストそのものから読みとれることを考えるという立場も可能であり、研究者によってもさまざまな見方がある⁽¹⁰⁾。いずれにせよ、われわれが用いる文芸批評的手法は歴史的手法と断絶するものではなく、両者が協力しつつテキストのメッセージを探っていくことを目的とする。

また物語批評による分析においては、読者は扱う章までの内容は知っているが、その後の内容はまだ知らない、という物語内の時間軸設定を重視する。ここでは、10 章までの内容は前提とするが、それ以後の章の内容は未知であるとする⁽¹¹⁾。

-
- (3) Richard N. Soulen and R. Kendall Soulen, *Handbook of Biblical Criticism*, fourth edition, Louisville, KY: Westminster John Knox Press, 2011, 134.
 - (4) David Rhoads, Joanna Dewey, Donald Michie, *Mark as Story: An Introduction to the Narrative of a Gospel*, Minneapolis, MN: Fortress Press, 1982¹, 2012².
 - (5) 厳密には「現在において可能な限り著者の自筆に近いものとして再構成された本文から得られる思想」と言うべきであろう。現在再構成された本文が著者の自筆と同一であるという保証はない。
 - (6) パウエルは、物語批評によって著者の意図を明らかにすることが可能であると述べる (Mark Allan Powell, "Narrative Criticism: The Emergence of a Prominent Reading Strategy," in: Kelly R. Iverson, Christopher W. Skinner, *Mark as Story: Retrospect and Prospect*, Atlanta: GA: Society of Biblical Literature, 2011, 19-43, esp. 32)。
 - (7) ここで「読者」とは、福音書の同時代から現代までを含めた幅広い読者を想定している。
 - (8) スキナーは、物語批評の課題は「内的読者 [implied reader] はどのようにテキストに応答すべきか」という問題に対して答えることであると言う (Christopher W. Skinner, "Telling the Story: The Appearance and Impact of *Mark As Story*," in: Iverson and Skinner, *Mark as Story*, 12)。
 - (9) 「歴史を切り離れた」ということは、必ずしも無歴史的な立場からの考察ということではない。あるテキストの背景にある歴史的状況 (例えば紀元一世紀におけるサマリア人=ユダヤ人関係など) を考慮することは十分にあり得るし、それを前提としないとそもそも意味が読みとれないこともあり得る。そのような背景知識としての歴史は、文芸学的な読解においても必要である (ただし、研究者によってその立場は異なる)。しかし歴史状況に絶対的な優位性をおくことはない。
 - (10) パウエルは、物語批評の中に「著者指向 author-oriented」「テキスト指向 text-oriented」「読者指向 reader-oriented」の三つが混在していると指摘する (Powell, "Narrative Criticism," 26-42)。
 - (11) Cf. H. Ito, "The Significance of Jesus' Utterance in Relation to the Johannine Son of Man: A Speech Act Analysis of John 9:35," *Acta Theologica* vol. 21 no. 1, 2001, 59.

物語批評における分析項目は研究者によって異なり、完全な一致を見ていない⁽¹²⁾。ここではレゼグエが挙げている項目である Rhetoric, Setting, Character, Point of View, Plot⁽¹³⁾ を物語批評の基本項目と見なす。ただし、彼の述べる Rhetoric は Structure と Form をも含んでおり、この点は分離した方がより明瞭であると思われる。また物語の語り手としての Narrator は、物語の進行を支える存在として無視できない。そこで、ここでは Structure/Form、Rhetoric, Setting, Character, Point of View, Plot, Narrator という7項目で分析を行う。

3) 研究史

ヨハネ福音書の救済思想の研究史の概要については既に述べてきた⁽¹⁴⁾。ヨハネの救済思想はさまざまな切り口から検討されているが、いずれも福音書の各所にばらばらに見られる表現・思想を取り上げ、(福音書の物語の筋を考えずに) まとめて一つの形にしたものである。救済思想をヨハネ福音書内部の物語展開との関係から考察したものはまだ存在せず、この点にわれわれの一連の研究の意義がある。

2 テキスト

今回は現在に伝えられるヨハネ福音書本文のうち、11:1—54 を対象とする。11:54 で区切る理由は、11:55 以降は過越祭が話題となる場面設定でありむしろ12章につながる内容であること、11:55 の「さて (ἤν δέ)」が話題の転換や注意を促すためのヨハネ的な接続表現であること⁽¹⁵⁾ である。テキストは、現在における最新の標準的な本文であると考えられる Nestle-Aland 28 版を用いる⁽¹⁶⁾。

11章に関する錯簡の指摘はない⁽¹⁷⁾。本文批評上の問題については、本文の意味に大きな影響を与えるような点は認められない⁽¹⁸⁾。

(12) 研究者による違いについては、拙論「ヨハネ福音書3章で語られる救済思想」27頁、注15を参照。

(13) James. L. Resseguie, *Narrative Criticism of the New Testament: An Introduction*, Grand Rapids: Baker Academic, 2005 参照。

(14) 拙論「ヨハネ福音書8章の救済思想」54頁および同「ヨハネ福音書6章の救済思想」50-51頁参照。

(15) マタ8回、マコ3回、ルカ18回、ヨハ54回、使10回。

(16) Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2012. (以下 NA28)

(17) ブラウンはこの部分を「本福音書で最も緊密に編み上げられた部分」と言う (Raymond E. Brown, *The Gospel According to John*, AB29, Garden City, NY: Doubleday, 1966, 376)。

(18) メツガーはこの範囲において8箇所を指摘しているが、われわれはいずれも翻訳委員会の決定に異議を唱えるものではないと考える。Bruce M. Metzger, *A Textual Commentary on the Greek New Testament*, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 19942, 198-200.

3 テキストの考察

3-1) Structure/Form / 構造 / 形式

スティブは 11:1—44 について、構造としては何も提案していない。ただし Plot として、1—16/17—37/38—44 という三分割を挙げている⁽¹⁹⁾。また 11:45—54 については、A1 45—46/ B1 47—48/ C 49—50/ B2 51—53/ A2 54 というキアスムスを指摘している⁽²⁰⁾。

11—12 章は 1 章から 12 章までのいわゆる「しるし福音書」の結びに当たる部分であると指摘しているのは正当である。しかし 11:1—44 について何も提案せず、11:45—54 という短い単位でのみキアスムスを指摘するというのは、都合のよい部分のみ構造を指摘していると言われてしまうであろう。また 11:45—54 に見られるというキアスムス構造についても疑問がある。11:49—50 のカイアファの発言が重要であることは確かであるが、福音書記者はさらに 11:51—52 において解説を加えており、カイアファの発言を理解する方向性を与えている。読者にとっては、発言そのものよりも、その発言をどう理解するかが重要であるはずであるから、むしろ重点は 11:51—52 にあると言えよう。

以上の考察を踏まえて、ここでは以下のように 11 章の全体構造を提案する。

- | | | |
|----|-------|---------------|
| A | 1—6 | 状況設定：導入 |
| B | 7—16 | イエスと弟子たち |
| C | 17—19 | 状況設定：ベタニアの状況 |
| D1 | 20—27 | イエスとマルタ |
| D2 | 28—32 | イエスとマリア |
| E1 | 33—37 | ユダヤ人たちの反応 1 |
| F | 38—44 | イエスの奇跡 |
| E2 | 45—46 | ユダヤ人たちの反応 2 |
| G | 47—54 | 祭司長・ファリサイ派の反応 |

他の章の奇跡物語と比べると、11 章では奇跡の実施に至るまでの説明が非常に長いという特徴が見られる。これは弟子たち、マルタ、マリア、ユダヤ人たちという 4 組の人々のイエスに対する反応を述べているためであり、奇跡そのもの以前にイエスをどう理解するかという点が重視されている。

イエスの言葉を理解し信じることによって命が与えられる (11:25—26)。ただ奇跡が行われるだけでなく、救いのためにはまずイエスを理解することおよびイエスに

(19) Stibbe, *John*, 122.

(20) Stibbe, *John*, 129.

対する信仰が必要であるということが重視される構成となっている。

3-2) Rhetoric / レトリック

11章でのレトリックには以下のようなものが見られる。

対話形式が複数用いられており、それぞれ対話を通して正しい認識に至るように構成されている。イエスと弟子たちの対話は大きく二つに分けられ(11:7—10 および 11—15)、それぞれにおいてイエスが弟子たちの認識を正していく。マルタとの対話(11:21—27)ではマルタの理解を深め、イエスに対する信仰告白にまで導いている。マルタとの対話は 11:39—40 にも見られ、マルタの躊躇を批判している。対話形式は他の章にも多用されており、ヨハネ福音書の特徴といえる。

本章において繰り返される表現には以下のようなものがある。「ラザロを愛する」という表現は、イエスとラザロとの親しさを強調している(11:5, 36。なお関連する表現として 11:11 「友」)。「四日」はラザロの完全な死を示す時間であり、イエスの奇跡の大きさを強調している(11:17, 39)。イエスが「心に憤りを覚える」対象は明確ではないが、イエスの感情を荒らす表現として注意を引く(11:33, 38)。マルタとマリアが共に発する「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」という言葉は、同じ言葉を発しながらもその後のマルタとマリアの対応が異なることを表しており、またイエスですら死を克服することはできないと二度繰り返すことによって、後になされる復活の奇跡をより印象づけている。

また 11 章では「死」と「命」「生きる」という対立概念が多用されている。ラザロの死をめぐって表される人々の嘆きを述べ、その上でイエスが命を与える存在であることを示している⁽²¹⁾。しかし 11 章の終わりには、イエスを殺そうとするたくらみが述べられる(11:53)。これは命を与える者が命を狙われるというアイロニーであろう。

11 章でのレトリックは、死をも超えて命を与えるイエスの力を明らかにすることを示すことに重点を置いている。

3-3) Settings / 状況設定

11 章では大きく二つの場所が設定されている。前半(11:1—16)では「ヨハネが最初に洗礼を授けていた所」(10:40)に滞在している。その後にはベタニアに移動する(11:17以降)。ベタニアはエルサレムに大変近い所であると説明される(11:18)。奇跡行為のあと、最終的にはエフライムに滞在する(11:54)が、これはベタニアよりもエルサレムから離れた場所である。

(21) ラザロの死をめぐる悲しみは何度も述べられるが、ラザロが復活した後の人々の反応は記されていない点に注意。

ここでは多くの登場人物が現れており、それぞれの立場から発話を行っている。いずれも基本的に対話の形を取っている点で、7章から10章に至る物語を受けた型式である。また、奇跡等のまとまった部分において、登場人物を最初に紹介するのはヨハネ福音書記者の特徴である（11:1。なお2:1; 3:1; 4:7; 5:5; 9:1を参照）。

場面における小道具であるプロップス（Props）として以下が挙げられる。

マルタとマリアは「家」にいた（11:19—20）。イエスの来訪に、マルタはすぐに出て行くが、マリアはイエスから呼ばれるまで家に留まっている。家は人々のいる場所であり、イエスに会うためには自分でそこから出て行かねばならないことを示している。しかもマルタとマリアがイエスと出会った場所は、村の外であった（11:30）。家を出るのみならず、自分の共同体から一歩踏み出したところにおいて、イエスと出会うことができるのである⁽²²⁾。

「墓」は、すでに5:28に現れており、しかもそこでは「時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、善を行った者は復活して命を受けるために……出て来るのだ」と述べられている。ラザロの復活の記事は5章のこの言葉を踏まえたものであり、11章においてイエスの言葉が実現していることになる。

祭司長たち・ファリサイ派の人々は「最高法院」を招集する（11:47）。ヨハネ福音書において、ユダヤ人たちとの論争はこれまで多く見られるが、最高法院が出てくるのは初めてである。ユダヤ社会の最高機関においてイエスのことが取り扱われ、イエスを殺そうと決められたことが示される。

本章の中で「ローマ人」が突然現れるのはやや唐突に思われる（11:48）。これまで基本的にユダヤ世界の枠内で物語が進んでおり、外国勢力がユダヤの神殿も国民も滅ぼしてしまうという発言は極端ともいえる。ここでは、イエスの勢力の拡大は外国からの侵略に等しい、国を滅ぼすほどの影響力を持っているという強調表現と理解することができるだろう。

以上のように、11章の状況設定および小道具は、イエスの力やその意味を理解するために多くの材料を提供している。

(22) ヨハネ福音書において、家の中でイエスが活動する例は13章以前にはない。共観福音書では家の中での奇跡も多く見られることを考えると、ヨハネ福音書でのイエスがもっぱら外で活動していることは特徴的である。

3-4) Characters / 登場人物

3-4-1) イエス

イエスは 11 章全体をリードする存在となっており、イエスは常に話題の中心となっている。イエスは人々の認識の誤りを正し、信仰を促し、奇跡を行う。奇跡行為を行うイエスに迷いはない。

11 章で特徴的なのは、イエスが感情をあらわにする点である。イエスは涙を流し (11:35)⁽²³⁾、憤る (11:33, 38)⁽²⁴⁾。11 章までにイエスが直接に感情を示す姿はなく⁽²⁵⁾、いわば冷徹な存在であった。そのようなイエスがここで初めて人間的な悲しみや怒りを示すことで、読者に新鮮な驚きを与えている。

11 章でのイエスは、本章までのイエス像に新しい面を加えており、読者の注意を引いている。

3-4-2) ラザロ

11 章において、ラザロ自身はごく一部のみに登場するだけであるが (11:44)、11 章全体はラザロの存在をめぐる人々の状況について述べられている。ラザロ自身については「病人」「ベタニアの出身」(11:1) と説明されるが、彼自身の内面等についての記述はない。

またラザロについて特徴的なのは、彼が周囲の人々、特にイエスとの関係性によって説明されている点である。つまりマリアとマルタの兄弟 (11:1—2)、イエスが愛した者 (11:5) と紹介されている。そして 11 章ではマリア・マルタ・イエスが主要な登場人物となり、それぞれのラザロへの思いが述べられていく。その中でマルタの信仰告白が示されており、ラザロを媒介としてマルタの信仰が描かれていることになる。

ラザロはいわば「影の主人公」であると言えよう。

3-4-3) 弟子たち

弟子たちは物語の冒頭に登場するが、ベタニアへの移動以降は姿を現すことがない。彼らはイエスと二種類の対話を行っている。11:7—10 でのユダヤに行くことを巡

(23) イエスが涙を流す直接的な理由は、イエスの力を信じることなく、ラザロを墓所に葬ったこと (11:34) と考えられる。つまりラザロへの愛ゆえではなく (11:36)、このユダヤ人たち言葉は彼らの表面的理解を表し、イエスの理解とのずれを暗示していることになる。

(24) イエスの憤りは、マリアやユダヤ人たちが泣いていること (11:33)、またユダヤ人たちの言葉 (11:36-37) を受けている。ここでの ἐνβριμιάομαι は「怒り」というよりも「非難」に近いものであると考えられる。イエスはマリアやユダヤ人たちの不信仰を批判しているのである。

(25) 2 章の宮浄めにおいてイエスが神殿の境内を乱す姿が述べられるが、そこではイエス自身の感情を示す語は含まれていない。

る対話では、ユダヤに向かおうとするイエスを引き止めようとする。続けてイエスはモノローグ的に語るが、その後の弟子たちの反応は記されていない。

11:11—15 におけるラザロの死についての対話では、弟子たちの誤解が示される。イエスはラザロの死を明言し、それは「あなたがたが信じる⁽²⁶⁾ ようになるため」であると言う (11:15)。この表現から、イエスの弟子たちは、イエスの目から見てまだ真にイエスを理解していないことが読者に示される。またこの言葉についての弟子たちの更なる反応も示されていない。

弟子たちはイエスを理解せず、十分に信じてもない者たちとして描かれている。これはその後、信仰告白をするマルタとは対照的である。

3-4-4) トマス

11:15 におけるイエスの言葉を受けて、弟子たちの内で特にトマスが発言する。ヨハネ福音書においてトマスの名が挙げられるのはここが初めてとなる。トマスの言葉は、11:8 で指摘された石打ちの危険に対応しているものと考えられる。ユダヤに行くことを尻込みする弟子たちに対し、イエスとともに行動することを呼びかける役割を担っている。

この部分のみからトマスの人物像を読みとることは難しい。物語上の役割としては、ラザロの死と絡めて「弟子たちの死」というテーマを導入している点が挙げられよう。

3-4-5) マルタ

マルタは本章の主要な登場人物の一人である。イエスの来訪を聞いて、村の外まで (11:30) イエスを迎えに出ていく。マルタはイエスに不平を言うが (11:21)、続けてイエスに対する信頼を告げる (11:22)。さらに復活をめぐる対話が続けられ、イエスに対する信仰告白で結ばれる (11:27)。これは続いて登場するマリアとは対照的である。この信仰告白はイエスが神の子、メシアであることを明確に示す重要なものである (11:27)。というのもユダヤ人たちはイエスがメシアであるかどうかを問うていた (7:26—27; 10:24)。またイエスをメシアと告白する者は会堂から追放されると知らされている (9:22)。ここでマルタは、死者の復活という最大の奇跡を前にして、イエスがメシアであることを告白することで、イエスが誰であるかをはっきり告げるものとなっている。

またマルタはラザロの復活以前からイエスに対する信頼・信仰を強く持っている人物として描かれている。これは奇跡の後にイエスのしるしを見て信じたユダヤ人たち

(26) ここでの信じる対象は、ラザロの復活、またそれを通したイエスの力と考えられる。

(11:45) と対照的な存在である。

11 章において、マルタはイエスに対する信仰を言い表す者として描かれている。

3-4-6) マリア

マリアはラザロの姉であり本章の主要な登場人物といえるが、マルタに比してその重みは低いように思われる⁽²⁷⁾。マリアはイエスの訪問に対しても家から出ない。先にイエスに出会ったマルタに、イエスに呼ばれていることを告げられて初めて、家を出てイエスに会いに行く (11:28—29)。マルタの言葉の冒頭部分とほぼ同じ言葉をイエスに対して告げるが⁽²⁸⁾、マリアはマルタのようにイエスとの対話をしたり信仰告白をしたりはせず、ただ泣くのみであった (11:32—33)。これはイエスの憤りを引き出し、奇跡の実行へと進んでいく。

マリアはイエスに対して受動的な存在として描かれているが、彼女を出発点としてイエスの奇跡実施へと移行するよう位置づけられている。

3-4-7) ユダヤ人たち

11 章でのユダヤ人たちは、ラザロの死についてマリア・マルタを慰めるために集まっている (11:19)。彼らによる積極的行動は僅かである⁽²⁹⁾。本章までに登場するユダヤ人たちと異なり、イエスとの対話はない。また彼らの言葉自体もやはり僅かであるが (11:34—37)、イエスに関する対立する評価が見られるのは他の箇所にも共通している (11:36—37; 45—46)。

ここでのユダヤ人たちは、続く部分に現れる祭司長たち・ファリサイ派の人々以外の人々であり、イエスを信じる者も信じない者も含まれている。信じるユダヤ人たちがいたということを明確に語り、続く祭司長たちの敵対的姿勢とは一線を画する存在となっている。

3-4-8) 祭司長たち・ファリサイ派の人々

祭司長たちおよびファリサイ派の人々は 11:46—53 というラザロの復活物語からは独立した部分に現れており、ラザロの復活に対する反応を示している。またこれらの人々は最高法院に関係しており (11:47)、11 章に見られる他の「ユダヤ人たち」とは区別されている。

彼らは、イエスの奇跡によって人々がイエスを信仰するようになっている状況に危

(27) 主の足に香油を塗り髪髪の毛で拭ったマリアとの説明があるが、当該物語は現在の文脈ではヨハ 12:1-8 に存在しており、後方指示となっている。

(28) μου の位置のみが異なる。

(29) イエスのことをファリサイ派に通報したのは積極的行動と言えよう (11:46)。

惧を覚える (11:48)。何らかの対応が必要であるという認識に至る。彼らはイエスの行った「しるし」に注目しており、マルタのような「しるし以前の信仰」については考慮していないが、これは「しるしを見なければ信じない」というヨハネ福音書の主張に沿ったものとなっている (4:48)。また彼らはカイアファの言葉を受けてイエスを殺すことを決定する (11:53)。すでにイエスを殺そうとする記述は随所に見られたが (5:18; 7:25; 8:59; 10:31)、それらは散発的なものであり、それらの後もイエスはたびたびユダヤ人たちの中に入って行く。最高法院という場での決定は重いものであり、そのためイエスももはや公然とユダヤ人たちの間を歩くことがなくなる (11:54)。

彼らはイエスに対する敵対意識のもとに行動しており、対立勢力として描かれている。

3-4-9) カイアファ

カイアファは、「その年の大祭司であった」と紹介される (11:49)。カイアファ自身の性格等を判断する記述はない。

彼の言葉は、祭司長たち・ファリサイ派の人々の指導者が語るものとして重みをつけられている。言葉そのものはイエスの死によってユダヤの国民全体が救われていると述べており、イエスを殺すことにする決定の根拠となるものである (11:53)。ただしナレーターによって別の解釈がつけられており、カイアファは意図せずこれらの言葉を語ったとされている (11:51)。

カイアファは敵対勢力のリーダーとして、イエスを殺そうとする根拠を示し、続く受難物語への流れを準備する存在である。

以上のような登場人物の人物像の分析によって、11 章ではイエスを信じた人々 (マルタ)、十分信仰を持たない人々 (弟子たち、ユダヤ人たち)、信じない者 (祭司長・ファリサイ派) が担う役割が明らかとなった。これらの登場人物の言動を通し、奇跡そのものよりもイエスに対する信仰が重要であることが示されている。

3-5) Point of View / 視点⁽³⁰⁾

11 章の視点は、奇跡物語への反応として示された、人々のイエスへの信／不信である。

語法的な視点からは、「死」と「命」「生きる」という対立概念が章全体にわたって幾度も用いられていることが注目される。一度は「死」に渡されたラザロが、イエスによって「命」を与えられ復活するという点は本章の大きな主題である。さらに、ラ

(30) 以下の視点はレゼグエに従う (Resseguie, 169)。

ザロに命を与えた奇跡のゆえにイエスが死に渡されようとするという逆説によって、イエスによって命を受けることの意味が問われてくる。

空間・時間の視点においては、イエスたちは当初「ヨルダンの向こう側」(10:40)にいたが、ベタニアに移動し(11:17—18)、章の末尾ではエフライムに辿り着いている(11:54)。ベタニアはエルサレム近傍であると敢えて指摘されており(11:18)、イエスがエルサレムに近づいて奇跡を行ったことを強調している。時期は冬(10:22)から春(過越祭、11:55)にかけての季節であり、自然が命を吹き返す季節がラザロの復活と重ね合わされているといえる。

心理的視点として、11章では各登場人物の心の動きが豊富に含まれている。弟子たちはイエスへの迫害を恐れ、トマスは無謀とも思える大胆さを示す。マルタは出て行ってイエスを迎える。マリアは直ぐには出ていかないが、後に出て行ってイエスにひれ伏す。ユダヤ人たちはイエスに対し、好悪両方の感情を示す。イエス自身も涙を流す。親しい者の死の前で人々の思いが交錯する。そのような人間的思いを超えるものとして死者の復活の奇跡が行われるのである。

思想的視点として、イエスをめぐる各登場人物の理解が対比されている。イエスに近いものたちであっても、弟子たちがイエスの言葉を理解していないのに対して、マルタは奇跡行為の前にイエスへの信仰を告白する。イエスから遠いと思われたユダヤ人たちもイエスを信じるが(11:45)、これは奇跡の後であり、マルタの信仰とは異なることが示される。イエスへの信仰は、奇跡行為によるものでなく、イエス自身を信じることにあることが示される。

以上のような視点は、イエスを信じることによって命が得られることを示している。

3-6) Plot / 筋

イエスは、自分を捕らえようとするユダヤ人たちを避けて、ヨルダンの向こう側に滞在していた(10:39—40)。続く11章ではその流れとは別に、新しい場面が導入される。ラザロが病気であると知らされたイエスは、しかし直ぐに向かうことはなかった。弟子たちとの会話において、ラザロが死んだことが明確にされる(11:14)。

イエスがベタニアに着くと、ラザロの死後すでに4日が過ぎていた(11:17)⁽³¹⁾。マルタとマリアはそれぞれイエスに出会い、ラザロの死について告げる。マルタとイエスの間の復活についての問答は、命と死を対置しており、イエスが命であることを強調する⁽³²⁾。マルタは信仰を告白するが、マリアは泣くばかりで、ユダヤ人たちはイ

(31) 「四日」は二度繰り返され(11:17, 39)、その時間の長さが強調されている。

(32) これは9章における「見えること」と「見えないこと」、さらにはプロローグにおける「光」と「闇」の対比を想起させるものである。

エスの力を疑った (11:37)。このような状況にイエスは心に憤りを覚え (11:33, 38)、神への祈りによってラザロを甦らせた⁽³³⁾。

この奇跡は、それを見たユダヤ人の多くを信じさせた (11:45)。しかし密告者によって祭司長たちやファリサイ派の人々の知るところとなり、最高法院が招集された (11:47)。そこではイエスを殺すことが相談され (11:53)、その結果としてイエスはユダヤ人の間を歩くことができなくなり、エフラムという町に下がった (11:54)

11 章の筋は、死者を甦らせるという奇跡物語が、イエスが殺される原因になったことを示している。命を与える者が命を狙われるという皮肉な展開となっている。

3-7) Narrator / ナレーター

11 章におけるナレーターは、物語の進行を支えている。場面を設定し、物語の順序を明確にするとともに、必要な前提情報を与えている。例えば、11:1 ではマリア・マルタ・ラザロという 11 章における登場人物を紹介することで、これらがこの部分における主要人物であることを示唆する。またイエスの奇跡行為の結果としてユダヤ人の多くが信じたと説明し (11:45)、続けてイエスに反対するファリサイ派の人たちの状況を説明することによって、イエスとの対立関係を明確にしている。

ナレーターは物語の筋書きを明確にする働きを担いつつ、イエスの奇跡が引き起こした結果によって信じる者と信じない者が生まれている状況を明らかにする。こうして、ラザロの復活という死者に命を与えるイエスの究極的な救済的行為について、信じる者たちと信じない者たちが明確に分かれていくことを示す。

4 まとめ

4-1) 救いについての思想の提示

(1) 死の克服と命の授与

ラザロ物語の最大のテーマは「死からの復活」である。これまでの癒しの奇跡においては、死にかけている者 (4 章)、重い病気を持っている者 (5 章)、重い障害を持っている者 (9 章) ではあったが、命は保っていた。しかしラザロは「死んだ」 (11:14) と明言され、かつ四日経っていることでその死の状況がより確実なものとして提示されている。また墓から出てきたときの姿も、死んで葬られていたことを示している (11:44)。

このラザロを甦らせたことは、死をも克服する神の力を示している。ヨハネ福音書

(33) マルタの言葉「あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています」 (11:22) は、先説法 (prolepsis) として読者に指示を与えていると考えることもできる。この言葉によって、マルタはこれからなされるイエスの奇跡を示しているからである。

においては、神ないしイエスのもとに命が存在することが述べられてきていたが（1:4; 3:16; 4:14; 5:21, 40; 6:27）、それがラザロの復活において具体的に示されたことになる。その意味で、ラザロの復活はヨハネ福音書の救済思想における頂点であると言える。

(2) イエスの力

ラザロの復活において、イエスは神に祈ることで奇跡を行う。他の癒しの奇跡ではこのようなことはなく、神に祈るのはここが初めてである。祈りの内容からは、神がイエスの願いを聞き入れていることによって奇跡が行われていると読める。しかしラザロの復活について具体的に願っているわけではない。

ここでは、イエスが神の力によってあらゆる奇跡が行われていたことが明らかにされる⁽³⁴⁾。これは執り成す者としてのイエス像を示しており、後に告別説教においても示される内容である（14:14）。イエスを信じることによって神への執り成しが行われることが示されており、命を得るためにはイエスへの信仰が重要となる（11:26）。

(3) しるしによる信仰と言葉による信仰

ラザロ物語においてイエスを信じるのはマルタとユダヤ人たちであるが、その立ち位置は異なっている。ユダヤ人たちは復活の奇跡の後でイエスを信じたが（11:45）、マルタは奇跡が行われる前にイエスへの信仰を明らかにした（11:27）。これはしるしに基づく信仰を低く見て、しるしによらない信仰を重んじるヨハネ福音書の考えに沿ったものであり、具体的な奇跡を挟んで両者を並べた形となっている。

(4) 救いを求めるのは誰か

11章の奇跡物語においては、ラザロ自身は復活を願っていない。また MARIA やマルタも「ラザロを復活させてほしい」と明確には語っていない⁽³⁵⁾。奇妙なことに、誰も頼んでいないのにイエスはラザロを復活させているのである。ヨハネ福音書のいやしの奇跡においては、親族の依頼（4章）ないし本人との対話（5章、9章）が前提となっている。11章においてもラザロの親族（マルタと MARIA）が出てくるが、イエスがいてくれたらラザロは死ななかつたのに、と述べるにとどまっている。

これは、救いが一方的に与えられるものであることを示している。それまでの癒し

(34) ヨハ 5:19-21。

(35) マルタと MARIA はイエスに人を遣わして、ラザロが病気であることを伝えている（11:3）。しかしここでも「病気をいやしてほしい」とは明示されていない。ただし5章・9章の奇跡物語では、いやしの要望がなくてもイエスはいやしを行っており、それらと同じ流れと見なすこともできる（なお4章の役人の息子については、はっきりといやしの要求がなされていることにも注意）。

も重い病気であったが、死からの復活はそれを超える最大の奇跡となる。その奇跡が、イエスの願いによって本人や周囲の意志を確認せずとも行われることは、イエスの執り成しの重要性を示している。

(5) 救いはどのように行われるか

ラザロの癒しについて、具体的な方法は何も記されていない。イエスが大声で呼びかけたのみである (11:43)。声を掛けるのみであるという点で 5 章における癒しと共通している⁽³⁶⁾。しかし 9 章のような本人の行為は含まれていないし、そもそも死んだラザロによる行為は不可能である。生き返るプロセスの詳細は問題とされていない点で、9 章の目の見えない人の癒しと共通している。

ここはイエスの声そのものが墓の中に届くというイエスの言葉 (5:28) が実現している点が重要である。イエスの言葉は文字通り命を与えるものであることが示された。イエスの言葉を聞く者はイエスによって命を得られる、という考え (11:25) はラザロの復活に限られない。これはイエスの言葉をもはや直接聞くことができないあらゆる世代に適用されるものとなる。最大の奇跡は、時間を超えた救済のメッセージとして示されることになるのである。

4-2) 読者への効果

読者に対するヨハネ福音書 11 章の効果には、次のようなものがある。

- (1) ラザロの復活物語において、イエスが既に死んだはずの人間を復活させる力を持っていることが示される。それは世の終末時におけるものではなく、現在における具体的な救済である。
- (2) マルタおよびユダヤ人の例を通して、奇跡によって信じる信仰よりも、イエスの言葉を通じて信じる信仰が重視されていることが示される。マルタとイエスの対話はイエスに対する信仰の核心を提示しており、読者もこの信仰へと誘われている。
- (3) 命を与える者が命を狙われるという緊迫した状況が示され、物語を先に読み進める動機を与えられる。

(36) 声をかけるという表現においては、プロローグにおけるロゴス（「言葉」とも訳しうる）との関係も考えられるが、ロゴスは 1 章にのみ用いられる言葉であり、これらの奇跡物語との関係は通常考えられないであろう。

5) 結び

ヨハネ福音書 11 章は、ラザロ物語を通して「イエスは命を与える者」という点をテーマとしている。5 章において予告されていた内容の実現として、死をも超えた力を発揮するイエスを信じる者に、命が与えられる。これは死の恐怖に対する大きな救済のメッセージである。またここにおいてユダヤ権力者からイエスが排除されようとしていることが明示され、受難物語に至る状況が整備されていく。このように、11 章は前後の物語の展開の中に当てはめて読むことでより理解を深めることができるのである。